

林内散策を誘う林の手入れ技術と情緒的判断要素についての試論

草苺 健（北海道開発協会）

はじめに

林の質は林に入り散策を誘うかどうかのきっかけに与える影響が大きい。また、手入れの効果がすぐわからない、林の手入れは危険である、林の手入れは難しい、きりすぎる心配が付きまとう、など手入れを断念させる情報も少なくない。

筆者は北海道・苫小牧のコナラを中心とした雑木林約30haを平成4年から20年まで保育管理し、その手法は当初は基礎的な林業技術をもとにしたが、年月を経ると、特に重要な選木基準と密度は、必ずしも厳密な技術マニュアルばかりでなく地域独自の手法があること、および、その手法は森林ボランティア等の作業者の樹木との交流を促すことができるという考えに達したので試論を述べる。

方法

上記の については、所定の手入れをした林としない林を林道の左右に数キロメートルにわたって設けて、左右の林相や印象の比較が容易にできるようにした。また、双方の林で、夏季、ライトとトラップによって昆虫を捕獲した。 については、選木の基準を定めて弱度に抜き切りをすすめ、2,500本/haを1,500から2,000本/ha程度にし、行政の林業指導機関から密度管理図によって間伐効果を判定してもらった。

結果

作業は枯損木や傾斜木を伐採し、ついで明らかな被圧木を抜き切りした。灌木が見通しをさえぎり作業の支障になるので予め刈り払ったが、林内の多様性を確保する観点から、エリアに珍しい灌木や空地の稚樹などは事前にマークをつけて保存するようにした。

1. 作業による変化

紅葉 その結果、最も端的に現れた変化は「紅葉」であった。林道の左右で作業の有無を分けたが、翌シーズンの秋、作業エリアの紅葉が極めて鮮やかに変化したのに対し、放置した側は紅葉はするもののくすんだものとみえ、差は歴然だった。これは間伐による太陽光の照射によると推測できる。

昆虫 夜間約二時間のライトトラップの結果では、甲虫や蛾を中心として多数の昆虫を採集したが、手入れを行った林が、しない林より多種類が捕獲された。このことから間伐によって多様な昆虫が生息可能な環境が生まれたことが予想される。

林の印象 訪問者に印象を聞くと、手入れした林は、「林内に入りたくなる」「気持ちよい」「清々しい」などの感想が寄せられるようになった。

2. 間伐効果

密度曲線では、強・中・弱と差をつけて間伐したいずれのモデルも間伐効果はないと判定された。

3. 手入れ作業の情緒的メソッド

この作業の10年以上の継続の中で、林業的メソッドをもっと情緒的に捉えて森林ボランティアも共有でき美的な森林景観に近づける方法がないか検討した。興味深い現象は下記である。

- ・作業経験者に選木を依頼すると、いずれのプロットでも通常はかなり少なめになった。
- ・かなり強度に抜き切りをしたつもりでも実効性ある間伐には程遠かった。
- ・手入れが遅れた枝が触れる過密の林では、伐採するとほとんどの幹に腐れがあった。

以上から、「枝が触れ合う」状態を回避する、という選木基準だけでもこのエリアの手入れの目安になると考えられた。これでおおむね弱度の初期の間伐は十分可能である。むしろ、簡単なこのような方法に平行して、樹木を擬人化して見て行く方法も作業者としては林との親近感を大幅に増す。例えば「枝先が触れて成長を停止」「縮れた枝先」を「ストレスに耐えている」「痛み」としてみるのである。そのことですべき対応はよりはっきり見えてくる。ただ歩くより作業することの密着性と対話性は高い。林との情緒的アプローチが、訪問者の情緒的な接近にプラスに働くのではないか。またパスを歩くこと自身がパスの景観形成を進めることの達成感も情緒的な言語化が可能だ。美的な取り扱いの情緒的アプローチを今後さらに検討してみたい。